

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2019/09/15 ～2019/09/30)

1. 勉学の状況

私は観光やホスピタリティについて学びたいと思い交換留学を希望した。私が来ている町、イギリスのヨークは、長い歴史を持つ観光地として有名である。そのためツアリズムやホスピタリティに関する授業がいくつか開講されている。私が前期に受講しているのは Tourism Industries, Hospitality and Events in the 21st Century , Study for Success の3つである。

各科目レクチャーとセミナーが1つのセットになっている。レクチャーは先生による講義型の授業である。セミナーは少人数クラスになっていて、ディスカッションや、生徒と先生のコミュニケーションが多い授業である。一週間に一つの科目に対して2つの授業が入っているため、基本的に週に6コマという構成だ。

授業が少ないように感じると思うが、いわゆる自主勉強の時間が重視されている。リーディングを基本として、ライティングなどの宿題も多く出るそうだ。まだ授業が始まって1週間しか経っていないためオリエンテーションしか受けていないが、授業が進んでいくにつれて宿題がたくさん出されていくのだと思う。

個人学習が重要視されている分先生によるサポートが手厚いため、英語が拙い留学生でも安心できる体制であると感じている。今は聞き取れないことも多く付いていくのに精一杯であるが、少しずつ慣れていければいいなと思う。

2. 生活の状況

私は今、寮生活をしている。自分も含め女子3人、男子3人の6人で2階建ての家に住み、一階に3人、2階に3人といったように部屋がわかれている。自分の部屋には机やタンス、ベッドなどがついていて、キッチンやバス・トイレは共同となっている。みんなで集まれるようなスペースがあるのはキッチンだけで、リビングなどの部屋はない。各家によって様々ではあるが、私の家は自分以外みんなネイティブで、各自がそれぞれ自分の生活をしているという感じである。たまたまタイミングが合えばキッチンで会うことがあるが、基本的にはあまり一緒にいることがない。良くも悪くもドライな関係である。ルームメイトではなくフラットメイトであるため、個人の空間が確保されているという面では日本人の私にはとてもありがたい環境であると感じている。

こちらに来て2日後から学校のオリエンテーションが始まった。1年生向けのオリエンテーションであったが、基本的には留学生という枠でのオリエンテーションが多く、他の国からの留学生たちと一緒に毎回オリエンテーションに出ていた。そこで驚いたのは日本人の多さである。こちらに来る前に、ヨークセントジョン大学には全体の1割しか留学生がいなくて、そのうちのアジア人の割合も少ないと聞いていたため、てっきり日本人は数人ぐらいだろうと思っていた。前期だけという人や、1年間という人など長さはバラバラではあるが、20人ほど日本人がいるのではないかなと思う。

始めは日本人と日本語で話してしまう自分が嫌で、それを変えなくてはいけないと自覚しつつも日本人と一緒に

にいてしまう自分の弱さにすぐ絶望した。このままでは何も成長しないという焦りに駆られていた。

最近気づいたことがある。それはここでの生活を楽しまなければ何も学べないということである。こちらに来て数日間は日本人と一緒にいては自分のためにならないと強く思っていた。しかし自分一人で日本人以外の人たちに話しかけ、輪に入ろうとしてもどうしても英語のレベルが違い、会話を続けさせることが難しかった。英語に自信が無く、人と話すことが好きだった私が会話をすることを無意識に避けていた。

だが、数日して日本人が一人でもいると自然に英語を話したいと思っている自分に気が付いた。そこから思うことは、日本人と離れようと思うのではなく、友達をたくさん作ろうという意識でいけばよいということだ。私の場合、日本人といると安心していつものように会話ができるため、そこに日本人以外の人がいっても英語でリラックスして会話をすることができる。日本語で話しているときのように楽しいときは楽しいと感じることができる。そこから友達の輪を広げていけば仲のいい人が自然にでき、英語を話すことに慣れることができることを発見することができた。実際に今は日本人以外にも仲の良い人が数人できた。楽しみながら、そして刺激を受けながら、充実した生活を送れている。変に考えすぎて押しつぶされ、ふさぎ込んでしまったままでは何も発展しないし、何も学べない。初めの時期は特に、焦らず新しい環境に慣れながら自分のペースで前を向くことが大切だと強く感じている。



(寮からの通学路。町の中心が城壁に囲まれていて、その脇を歩いている。奥に見えるのが町の中心にあるヨークミンスター)



(左：360度建物に囲まれているキャンパスの一部の内側から撮影。

右：歩道から見るキャンパスの一部の外観)

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2019/12/01 ～2019/12/31)

1. 勉学の状況

12月 は前期の学期末で全体的に課題のレポートに追われていた。前期に取っていた3つの授業は全て、テストではなくレポートが最終課題として評価対象になっていた。日本人の私にとっては一発勝負のテストによる評価でなくてよかったと思うが、その分膨大な量のレポートを書かなければいけなかった。文献等を読み、理解するだけでも相当な時間がかかったが、それをまとめ、自分のテーマについて母国語ではない言語でレポートを書くことがとても大変であった。他の留学生（特に英語を得意としないアジア人留学生）と苦悩を共有しながら頑張っていた。図書館が24時間開放されているかつ、キッチン付きであるため、夜遅い時間まで残って作業に集中できる環境があったことはとてもありがたいと思っている。

2. 生活の状況

12月の13日から冬休みに入った。前期は冬休みをまたいでいたため、冬休みの初めは課題を終わらせることを目標に図書館通いの日が数日続いた。

それが終わると、18日から年を越して1月まで、3週間ほどの旅をした。ルーマニア人の友達に会いにブカレストまで一人で生き、数日間友達の家泊まった。その後、イタリアのローマで、同大学に留学していた日本人の友達と合流し、そこからフィレンツェ、ベネチア、ミラノ、スイスのチューリッヒを回り、イギリスに帰った。クリスマス、年越しはともにイタリアで過ごし、日本では味わえないような文化を感じることができ、とても贅沢な経験であったと思う。もちろん楽しかったという感想はあるが、それ以上に自分自身が成長できた旅であったと感じる。異国の地での長期の旅だからこその複雑な宿や交通機関の予約、そもそも英語が通じない人たちとのコミュニケーション、宿を転々とする中での様々なバックグラウンドを持つ人達との出会い。楽しいことばかりではなく、程よい困難もある、充実した旅であった。

そして12月は地域の観光案内所でボランティアを始めた月でもある。観光業を学んでいたことや、漠然と何かやってみたいという思いから挑戦した。週に3時間が2回のシフト制で、他のスタッフは多くが現地のおじいちゃんおばあちゃんであった。拙い英語であるにも関わらず、話を聞いてくれたり、サポートをしてくれるような優しい人ばかりであった。しかし、観光案内所に来る観光客や、イベント情報などを求めてやってくる現地の人たちに、来て数カ月の留学生が対応するのは決して簡単ではなかった。ヨークの町についての知識を入れるところから始まり、自分でいろんなところを回ってみたり、テストをしてもらったり、接客の練習をもらったりしながらなんとかしがみついていた感じである。ボランティアとして力になるどころか、他のスタッフの人たちの足手まといになってしまったかもしれないが、留学先で、自分で動いて何か

挑戦したという事実が自分を強くしていたと思う。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2020/03/01 ～2020/03/22)

1. 勉学の状況

後期の授業のちょうど半ばぐらいの時期であった。新しい授業の先生、授業の形、周りの生徒とのコミュニケーションに徐々に慣れ始め、自分の勉強のスタイルを確立できてきたころであった。①British Sign Language Beginners 1 の授業では、実技の中間テストに向けて、授業を受けた後の復習を欠かさずに行っていた。少人数制であったため、周りの生徒とも協力しながら学習を進めていた。②Childhood の授業は、毎回の授業に課題が出されていた。それを次の授業の時にグループワークを通してチームで意見をまとめ、みんなの前で発表するという形であった。学習時間も一番多く私にとっては難易度も一番高かった。しかし、先生や周りの生徒たちが私の語学レベルを理解し始めてくれたため、サポートをしてくれたり、エラーがあっても柔軟に対応してくれたりした。③Social Inequalities: Key Themes の授業では、イギリスでの社会格差について勉強していたが、日本や他の国における社会格差について質問されることが多く、私を含め、留学生たちが発言する機会が多かった。片言の英語であったが、自分の意見を人々の前で発言できるようになったことはとてもよかったと思う。

授業以外でも、自分の英語力の向上を感じられた。以前では人の話を聞いて、それに少し反応するぐらいしかできなかった。しかし、友達とのたわいもない会話の中で冗談も言え、自分の意見を相手に伝えることができるようになり、純粹にコミュニケーションが楽しいと思えていた。

2. 生活の状況

留学最終月である 3 月は、あらゆるものが変則的な状況であった。世界中で流行した新型コロナウイルスによって、イギリスは早い段階から打撃を受けていた。それに伴ってそれまでにやっていた学校の授業及びボランティア活動、その他さまざまな活動がストップしてしまった。周りの留学生、特にヨーロッパの国から来ていた留学生たちは次第に母国からの強制帰国要請を受け始め、次々にいなくなってしまった。その時はまだ日本はさほど流行しておらず、私を含めた日本人留学生はのんびりしていた。日本での流行が拡大し始めると、他の大学から来ていた日本人留学生も帰国を決断し始め、遅れて自分も早期帰国を決断することになった。学校での授業が無くなり、非日常的な生活になってから帰国を決断するまで 1 週間足らず。帰国を決定してからは帰国日まで 3 日ほどしか残っていなかった。身の回りの片付け、両大学との連絡等の帰国の準備をあわただしくしていた。

帰国 2 日前、せっかくだからと残っていた留学生と街を散歩し、ヨークという街を目に焼き付け、その夜は残っている留学生、現地の友達たちとささやかなお別れパーティーをした。

気が付くと帰国していたような、嵐のような最終月であったが、イギリスでの留学生活に未練

は残っていない。